

2112 離島覚書（長崎県赤島・泊島）



赤い橋の先が赤島・泊島

赤島大橋

対馬島の属島のうち有人島は、対馬北部の鰐浦沖に浮かぶ海栗島と、島山島、沖ノ島、赤島、泊島の5つである。赤島と泊島はもともと別の島だったが、40～50年前に埋め立てられて陸続きになっているので、ここでは1つの島として扱うことにする。

対馬の上島と下島を結ぶ万関橋を渡り、国道382号を北上すると右手に廃校となった中学校がある。この角を右折して市道小船越赤島線に入り、まっすぐに進むと住吉大橋に出る。この橋を渡った先が沖ノ島である。沖ノ島の尾根筋につくられた道路をさらに進むと、欄干を赤く塗った赤島大橋が現れた。この橋を渡った先が赤島だ。

沖ノ島と赤島の間の瀬戸は猫瀬戸と呼ばれ、ここに1980年に橋が架かり、赤島は対馬島と陸続きになった。赤島・泊島は下県郡船越村に属していたが、1955年に美津島町になり、さらに2004年の町村合併により現在は対馬市になっている。橋がなかった時代は船が唯一の交通手段であった。子供たちはスクールボートで本土側の鴨居瀬小学校（現在は廃校）に通っていた。

赤島・泊島の面積は0.58 km²、周囲は8.0 kmである。2015年国勢調査時の世帯数は、赤島側が8戸、泊島側が4戸で、人口はそれぞれ13人、9人であった。つまり併せて12戸、22人が住んでいた。直近の住民基本台帳上の世帯数は25戸で、人口は38人であるが、この中には沖ノ島も含まれている。

ちなみに宮本常一が調査した1950年8月時点の赤島の世帯数は37戸で、このうち広島県から移住した世帯が17戸、島根県の石見が13戸、福岡県2戸、山口県1戸という内訳であった。この当時に較べると世帯数は1/3に減少している。

赤島の集落は、①泊島との水路の両側に形成された集落と、②この南にある比較的奥行き

の浅い湾内に形成された集落、の2つに分かれている。



赤島側から見た赤島大橋（左）、スクールボートで通っていた旧鴨居瀬小学校（右）

猫瀬戸の開削

赤島大橋の赤島側のたもとに猫瀬戸を開削した故事を紹介する顕彰板が設置されている。美津島町漁協が2007年に立てたものである。この故事は1950年8月に宮本常一が当時すでに90歳を超えていた橋本米助に聞き取りをして書かれたものが基になっている。¹⁾そこで宮本の聞き書きから猫瀬戸開削の経緯と赤島の歴史を振り返っておこう。

赤島に最初に住んだ人は、広島県向洋（現広島市南区）出身の住井良平であった。彼は明治の初めのころに賀谷（赤島から2kmほど北西の賀谷湾奥）に小屋掛けしてイカ釣りをしていたが、下関から女郎を連れてきたため仲間から村八分になり、この女郎と夫婦になって無人の赤島に住み始めたようだ。一方、広島と厳原を結ぶ通信船（広島藩の浅野家から対馬の宗家に嫁に来たので両藩は交流があった）の船乗りとして対馬に来ていた橋本家の松次夫婦（橋本米助の兄）が住井と組んで赤島でスルメの製造を始める。ところがこの兄が別の女と駆け落ちしていなくなったため、弟の米松が赤島に来てスルメの加工に携わったのであった。

当時の対馬はイカの資源が豊富で、全国からイカ釣りの漁師がやって来た。冷蔵庫がない時代だったから、イカは「スルメ」に加工して保存性を高め、加工品として流通していた。赤島は内地から遠征してきたイカ釣り漁船からイカを買い上げ、スルメ加工によって発展する。赤島と泊島の間は深い入り江になっていて天然の良港だったから、多くのイカ釣り船がやってきた。ところが南側の進入口、つまり現在赤島大橋が架かっている南側の猫瀬戸は水深が浅く、干潮時には船の行き来が難しい難所であった。とりわけ時化の日は航行が危険であり、多くの漁船が遭難した。このため、赤島を大回りして北側から入港しなければならなかったのである。

そこで、橋本米松は猫瀬戸の浅いところを開削して、南側から漁船が入れるようにするため、瀬戸の開削を断行する。当時の金で546.87円の私費をつぎ込み、1912（明治45）年に開削工事に着手した。イカ釣り船が多く入るようになれば、工事費を回収できると踏んだのであろう。重機がない時代にどうやって岩を掘削したのか、宮本常一の聞き書きをもとに整理しておこう。

干潮時に干上がった岩に穴をあけ、火薬を詰めて爆破する。干潮時に海女・海士を使っ

て爆破した岩にチェーンを掛け、満潮になると岩は浮き上がるので、船を沖に移動してチェーンを解いて捨てた。潜水作業は曲（福岡県鐘崎出身の集落）の海女・海士に頼んだ。かくしてイカ釣り船が多く入るようになり、赤島は大いに繁盛したのである。その後、移住者が相次ぎ、上述したように1950年には37戸に増えていた。

米松はその後、朝鮮半島に渡り、スルメ加工で稼いだお金で農地を購入したが、敗戦で全財産を失い、宮本が赤島で聞き取り調査をした時には、90歳を超え、一人で暮らしていた。老年に至るまでの労働のため足腰が効かなくなり、ほとんど無一文になって赤島のほとりで借家暮らしをしていたのである。



現在の猫瀬戸（左）、大きく開けた瀬戸の北側（右）

塩づくり

赤島大橋を渡り、赤島の尾根筋に造成された道路を北上し、島の北端に出た。赤島の集落に下る坂道の右手に、何とも雑然とバラック小屋が立ち並んでいた。自然の風景とはなじまない異様な風景というのが第一印象だった。何やら丸太を組んで、昔、製塩に使っていた枝条架のようなものもあったので、塩でも作っているのではないかと思ったが、島の人に確認すると間違いなかった。

ここでは福岡県からやってきた2業者が塩を作っている。通常、塩は風や太陽光を活用して濃度の高い海水をつくってから釜で炊いて水分を蒸発してつくるのだが、この施設には釜や燃料などが見当たらない。ハウスの中をのぞいて分かったのだが、いわゆる天日乾燥方式で塩をつくっていた。つまり海水を浅い平板状の容器に入れて、太陽熱により水分を長時間かけて蒸発させ、塩を析出させる方法である。製造に時間はかかるが、燃料が不要なのでコストは掛からないという利点がある。

施設には誰もいなかったもので、放りばなしの状態ですぐ乾燥するのを待ち、析出した塩をかき集め、にがりと塩を分離しているものと思われる。この製塩施設は木製の柱や梁を建て、半透明の樹脂板で屋根と壁を覆った簡易的な建物である。施設にお金を兼ねていないのは賢明な配慮と言えよう。

ホームページで調べると、天日塩普及会と橋本清澄氏が代表を務める「玄海塩の会」が、1994年からここで塩を作り始めており、2003年には第2塩田を増設したというから、もう27年の実績がある。ちなみにここで作られた塩は、210gで756円とかなり高価である。旧来の釜炊きの製塩をやっているところでも、最近はこの天日製塩法を導入して

いるのを目にするようになったので、この種の塩が好事家の間で流行っているのかもしれない。



天日製塩場の建物（左）、海水を満たした浅い平板の容器（右）

埋め立て

製塩所から坂を下った先は深い入り江になっている。実はこの入り江はもともと水路（海峡）で、対岸の泊島とは分離していた。今から 40～50 年ほど前に水路の北半分が埋め立てられて、赤島と泊島は陸続きになったのは上述したとおりだ。この水路の水深は浅く、埋め立てられる以前はアサリがたくさん採れたそうだ。この埋立地の一部は後述する定置網の網干場として使われており、一方、奥の方は草が生い茂っていた。

人家は水路を挟んで泊島と赤島の海岸沿いに並んでおり、泊島側に 3 世帯、赤島側に 5 世帯が住んでいる。元の海岸線は屈曲していたが、その海岸線の山際に家が建てられた。その後、おおむね直線的な護岸がつくられ、旧海岸線との間は埋め立てられて、わずかばかりの平地が形成されている。

今はどうなっているのかわからないが、もともと赤島と泊島の土地は、親村の鴨居瀬の人たちの共有地であった。スルメ製造のために必要な用地は鴨居瀬の集落と土地借用証を交わして借りていたのである。期間は 3 年で、そのたびに契約を更新していたが、その内容は様々な制約が課せられた厳しいものであった。

雨が降り続いていたので車から外に出ず、集落を眺めていたが、そのうちの 1 軒の家の窓に女性が現れたので、傘をさしてその家の軒下まで行き、島の様子を聞いた。

彼女は 70 歳後半と思われるが、いたって元気だ。対馬本島の佐須奈から嫁に来たという。ご主人はアワビやサザエを対象とする採貝漁業を営んでいるが、歳をとったため、あまり漁には出かけない。彼女は対馬の歴史に興味をもち、若い時にはよく調べたらしい。宗家が対馬を支配する前は阿比留氏が支配していた。この阿比留氏は上総国（現在の千葉県）から対馬に渡って来たと言っている。

対馬には銀山神社があり、古くから銀を産出し、江戸時代は銀の算出で栄えたそうだ。この時代に島根県の石見銀山から石工が対馬にやってきたらしい。この家の出自は語らなかったが、上述したように赤島はよそから来た人によって形成された集落で、宮本常一が調査した 1950 年では石見の出身者が多かったことは上述した通りである。ちなみに石見からの移住者は宮本によると現在の益田市飯浦から来た小鯛（レンコダイ）縄の船だったようで、

石工とは別だったものと思われる。また、曲地区は福岡県の鐘崎から来たとも語っていた。

近年の対馬は、以前多く獲れたイカやブリはさっぱり獲れなくなり、漁業は厳しい状況が続いているという。また子供たちを島外の大学に通わせた結果、高学歴になり、島外に就職し島に戻って来ない。彼女によれば、これは自業自得で、結局、島はどんどん寂れていくだろうと嘆いていた。



赤島と泊島間の水路（左）、埋め立てられた水路（右）、左が泊島、右が赤島

漁師

埋立地の角に岡野鮮魚と書かれた看板が掛かり、道路を隔てた反対側の家の前に中年の男性が腰かけていた。家の入口に「忌中」と書かれた紙が貼ってあるのに気づき、一瞬躊躇したが、男性がフランクに受け入れてくれたので、島の漁業について聞いた。

本人は広島県の呉で季節労働に従事しており、赤島と広島の間を行ったり来たりしている。本土側の鴨居瀬でイワガキ養殖をしている人（赤島に来る前にお会いしイワガキ養殖の話聞いた人）とは友達で、呉でカキ養殖の準備作業などを手伝っているようなのだ。ちょうど父親が亡くなり、実家に戻ってきたところだった。父親が亡くなったため、これからは広島への出稼ぎはやめて、島での漁業に専念する方針だという。

岡野鮮魚は、建網と延縄を営んでいる。建網ではカサゴなどの磯魚類を、延縄ではレンコダイ、タカバ、クエなどを獲っている。対馬の延縄は瀬戸内海から伝わったものなので（延縄漁の盛んな水崎地区は広島からの移住者によって集落）、岡野さんの先祖は広島から来たにちがいない。

漁獲した水産物はもっぱら本島のいずしょう（？）やスーパーサイキなどの小売店舗で直接販売している。地産地消が実現されていることになる。

上述したように赤島には2つの集落があるが、赤島と泊島間の集落には8世帯（赤島側：5戸、泊島側：3戸）が生活しており、そのうちの7戸が漁業を営む。残りの1戸はスクールボートの船長をしていた人で、高齢になり隠遁生活をしているとのことだ。南側の集落には4戸が生活し、何れも漁業を営んでいる。島には家庭菜園ほどの農地があるだけなので、島民は漁業一本で生計を立ててきた。

赤島・泊島の漁業者は美津島町漁協鴨居瀬支所に所属している。現在の組合員は正が7人、准が4人の合計11人である。もともとは赤島漁協として独立していたが、組合員が減ったため1974年に鴨居瀬漁協に吸収合併され、1998年に尾崎、大船越、三浦湾の3漁

協と合併して美津島町漁協となった。さらに 2000 年に美津島町東海漁協を吸収合併し、現在に至っている。同支所は、現在、支所長と職員（何れも男性）の 2 人で運営されている。

2019 年の赤島漁港（第 1 種）の港勢調査によると、組合員数は 15 人（うち正：10 人、准：5 人）で、対象地区の住民は 40 人であった。この中には沖ノ島も含まれるので、沖ノ島の組合員数は 4 人（正：3 人、准：1 人）ということになる。

同年の漁業生産量は 69.8 トン、生産額は 55 百万円であった。漁業種類別の生産量は定置網が、55.3 トンと最も多く、次いで一本釣り（5.4 トン）、採貝（3.8 トン）、イカ釣り（3.7 トン）、延縄（1.6 トン）の順であった。魚種別ではイカが 35.3 トンと最も多く、次いでブリ（10.3 トン）、サザエ（3.7 トン）、マグロ（3.4 トン）、サバ（3.2 トン）、サワラ（2.8 トン）、アジ（2.6 トン）、タイ（1.1 トン）と続き、トビウオ、シイラ、ヒラメ、アワビなどが獲れ、その他の魚類が 30.7 トンであった。

赤島で営まれている漁業は、潜水漁業が 2 経営体、延縄が 2 経営体、イカ釣り、曳縄、そして後述する定置網である。曳縄の漁期は 12～4 月で、ヨコワ、サワラ、ハガツオなどを対象とする。なお対馬の東側はマグロが少なく、西側に多いという。



岡野鮮魚の作業小屋（左）、旧水路の係留されている漁船と集落、右側が泊島（右）

定置網

赤島の漁業生産の太宗を占めるのが定置網漁業である。泊島側の護岸にデリック付の漁船が係留されていたが、この船が定置網の網揚げ用の漁船であった。定置網は斎藤さんという方が営んでおり、大型定置網と小型定置網をそれぞれ 1 ヶ統ずつ保有している。

斎藤さんの家は泊島の先端にある 2 階屋で、家の前には定置網を固定する土嚢袋が置かれていた。そのうち家の中から家人が現れ、魚のアラのような家庭ごみを無造作に海に捨てた。生ごみは海の生物の餌になり、有効な物質循環が生じているのだろう。過疎の島では有機物の負荷は環境汚染にはつながらず、有効な資源循環になっているようなのだ。人口の多い場所ではこういうわけにはいかない。

定置網は斎藤さん父子と他から 2 人を雇い、合計 4 人で営んでいる。本来は少なくとも 5 人の労働力を必要とするようだが、人手の確保が難しいらしい。

定置網の漁獲物はブリ、サバ、サワラ、アジなどで、赤島漁港に水揚げされる。定置網は島の漁業生産の約 8 割を占め、生産額は 4,000 万円前後と推定される。

漁獲物はフェリーを使い、もっぱら福岡市中央卸売市場に出荷されているようだ。



定置網の網揚げの船（左）、先端の家が定置網の船主・斎藤さんの家（右）

南の集落

横断道路に戻り、赤島大橋に向かう。島の中ほどに右手に下る脇道があったので、坂道を降りていくと海に出た。凹形をした入り江が形成され、北西からの波を遮るように一本の小さな消波堤がつくられている。2つの入り江があり、護岸が整備され、海岸に沿って舗装道路も整備されている。

道路と山際間に住宅が並ぶ。また海岸沿い以外にも山の中腹あたりに複数の廃屋が見られ、かつてはこちらの集落の方が、世帯数も人口も多かったと思われる。

南の集落には、2階建ての旧漁協の事務所らしき建物（現在は集会所として使われている）があり、JFの石油タンクや消防格納庫などもあり、こちらの集落の方が島の中心だったことが伺われる。

赤島漁港（第1種）には漁船が5隻係留されていたが、うち2隻（1隻はイカ釣り、もう1隻は曳釣り用）が並んで係留されており、1軒で2隻所有しているものと推定される。上述したように南の集落の漁業者は4人なので、1経営体が2隻を保有するとすれば、漁師の数と漁船の数は符合することになる。

海沿いの道をそのまま進むと、坂道になり、坂を登った先が赤島大橋であった。この日は巖原に泊まることにしていたので、国道382号に出てまっすぐ巖原のホテルに向かった。



草木に埋まる廃屋（左）、係留されている2隻の漁船（右）

【文献】

- 1) 宮本常一・山本周五郎・楫西光速・山城巴監修（1978）：第1章島に生きる人々、禁じられた海、ある老人と海、忘れられた土地、日本残酷物語2。平凡社。東京。51-81.
- 2) 宮本常一（2007）：船越村赤島聞書、長崎県対馬調査ノート(2)、宮本常一農漁村探訪録。周防大島文化交流センター。62-75.